

アメリカ合衆国の葬儀と葬儀社

松本由紀子

アメリカ合衆国民の葬儀において、葬儀社のはたす役割は日本に比べて遥かに大きいものである。それはただアメリカの葬儀ビジネスが産業として発達しているからというだけでなく、そうしたビジネスがこの社会に特有の人々の在り方を支えているからであると考えられる。本論文は、アメリカの葬儀と葬儀業者の在り方を見るとともに、実際に見学した葬儀社、葬儀大学の在り方を述べる中で、これを検討するものである。

(0) はじめに

原題が"Passed Away"、日本でもビデオで公開された映画がある。アメリカのある地方都市の中流の家庭で、父親が突然亡くなって起こる騒動を描くコメディである。葬式というとやたら張り切ってお節介な伯母さんたちが大勢押し掛けたり、謎の若き美女が現われて父親の隠していた愛人かと思ったり等の出来事がコミカルに描かれる。日本でも話題になった伊丹十三の「お葬式」という映画を彷彿とさせる所もあるが、やはり幾つかの点では、葬儀への家族や業者の関わり方に、彼我の違いが見られる。

例えば家族の在り方については、何と云ってもこの映画の描く騒動は、大人になって家を出たこども達が、何年かぶりに顔を合わせる事から起こっているのであるが、成人した子供と老いた両親とが各々違う仕事につき、別個の家庭を築き、遠く離れて暮らすことはアメリカでは珍しくないことである。

また遺族と葬儀業者との関わりという点では、アメリカの葬儀業者は日本よりはるかに大きな役割を、葬儀において果たしている。例えば、父親が不意に亡くなった時、息子が電話す

るのは、まず医者と、そして葬儀社である。というのは、遺体の病院からの引取などはすべて葬儀社が遺族に代わって行うからである。また葬儀社を早い段階で決定しなければならない理由に行政手続き上の理由もある。アメリカのほとんどの州では医師が死亡診断書を書き、保健衛生局に提出して火葬、あるいは埋葬許可をえるのだが、この死亡診断書に、医師と共に葬儀社のサインが必要となるのである。それほどすぐに葬儀社を決定することは普段からの用意がなくては難しいが、アメリカでは葬儀を生前に契約して準備しておく制度が早くから普及している。映画でも父親の葬儀を請け負った葬儀屋が、長男にそれをしきりと勧めているシーンがある。

遺族は、葬儀社が防腐などの処置を施し化粧し納棺してから初めて、遺体と対面する。映画では、遺族は葬儀社へ行って展示してあるなかから柩等を選んで、処置中の遺体には面会せずには帰り、家で納棺された遺体が届けられるのを待っているのである。またこの対面も普通は自宅ではなく葬儀社の施設内のホールで行われる。自宅を通夜をすとか墓穴は長男が掘るのが慣例だなどと言われて長男が仰天するシーン

があるが、一度も自宅に遺体を戻す事無く埋葬する方が一般的なのである。

また映画では、この対面の折葬儀業者が、「処置したのはエンバーマーの～です。」と紹介し、「実に美しいですね。」とその出来栄を自賛するが、息子達は赤い頬紅にぎょっとして声も出ないという場面がある。エンバーマーとは、遺体を防腐処理し化粧して故人の生前の様子を再現する専門家である。こうしたトラブルはままあるというが、ともかくまるで生きているかのように見える遺体が立派な柩に納まっているという「美しさ」こそが、葬儀のポイントなのである。

以上では映画から、アメリカの葬儀の特色と、その中で葬儀社のはたす役割の重要性について述べた。アメリカでは、葬儀業者が専門家として葬儀の過程に関わることで、遺族や近隣との社会関係に依存する事無く、故人が自らの為に葬儀を演出した、という効果を生むのである。このような葬儀と葬儀業者の在り方には、アメリカ社会の、死との関わりにおいて表れる、個人の在り方や身体観の特色が、最も顕在化していると考えられる。こうした考えにしたがって、本論文はアメリカの葬儀と葬儀業者の在り方を見てゆく中で、アメリカにおける死をめぐる表れる身体観や人格の在り方を明らかにするものである。以下では、まずアメリカの葬儀の、埋葬までにいたる手順と葬儀業者の関わり方を見た後、1994年10月27日から11月4日まで現地へ赴いて見学した葬儀大学・葬儀社について記述する。そしてその中に表れた特有な身体観や、そうした身体観を持った人格の成立を、第三者機関として支えている葬儀社の在り方について考察する。

(1) 死者をホストとする、明るく美しい葬儀

現代アメリカ合衆国の葬儀は、死者個人をホストとして演出されるパーティのように組織化されている。それは葬儀において明るく華やかな演出が好まれること、また遺体の陳列が重視されることのみならず、細かな手順の中で、葬儀が死者個人のために、遺族ではなく死者の手で演出されたという効果を、葬儀社という専門家の手を借りることで生んでいることから言えることである。以下で詳しく見てゆこう。

死亡から埋葬までの儀礼は、通常次のような手順で行われる。死亡後、遺体はまず葬儀社に運ばれる。引取は通常業者Funeral Directorの手で行われ、葬儀社Funeral Homeのエンバーミング・ルームでエンバーマーEmbalmerによって消毒、防腐、修復、化粧などの措置が施されたのち、葬儀社の小部屋に展示され、そこで"visitation"が行われる。これはかつては"wake"、つまり通夜であって、死者の家に近隣の人々が夜を徹して集まり、飲食したのであったが、現代では"calling hours"または"viewing"とも呼ばれるように、多くは午後、あるいは夕方の限られた時間内に、弔問客が葬儀社に展示された遺体に会いにやってくるというものである。

遺体は防腐され消毒されて、遺族がキスなどの接触をしても感染の危険などがないようにしてある。また病のやつれや怪我等も修復されて、まるで生きているかのように、あたかもちょっと目を閉じているだけのように見える⁽¹⁾。こうした死の決定的な雰囲気や否定するような演出は衣服や棺にも表れていて、遺体に屍衣を着せる事もまた遺族が喪服を着る事もない。遺体はドレスや背広などを着て、上等の詰め物をされた明るい色のサテンの装飾りのついたシーツに埋まっている。暗い色や悲嘆を表す陰鬱な装飾などはなく、全ては明るく華やかで、死の影など見られない様子に作ってあるのである⁽²⁾。

宗教的な儀礼としての葬儀はその後、教会、あるいは葬儀社の建物内のチャペルで行われる。現在ではこの儀礼には出ず、visitationのみ訪れる人が多いという⁽³⁾。また、参加する人々は普通平服であり、また儀礼も宗教的なものではなく、音楽や写真の展示など行う世俗的な儀礼や、あるいは友愛クラブのメンバーによる儀礼も増加しているという。従って現代アメリカの葬儀において重要なのは、宗教的な儀礼ではなく、むしろ遺体を展示するvisitationであると言えるだろう⁽⁴⁾。

その後、遺体は埋葬されるが、アメリカではまだ8割近くは土葬である。柩はしばしば金属で、また柩をvaultと呼ばれる、コンクリートか金属の箱に収めて個別に土中に埋葬することが多い⁽⁵⁾。墓地の区画は基本的には個人か夫婦の単位で売られている。日本のように使用権ではなく不動産として販売されるのであり、また管理費もない。墓地の管理は墓地の売却費を信託にして、その利子で、企業が永遠に管理してゆくのである。これはモーソリウムと呼ばれる、火葬しない遺体を地上の建造物の棚に収めて密閉する場合でも同じである。いずれの場合でも、遺体は土に還る、というよりは、密閉された柩のなかで永久に個人別に、という感覚が重視され、またそれも遺族の手によってではなく葬儀社という第三者の手で保管されるのである。葬儀社という第三者との契約によって、故人は遺族の恣意や生前の近隣との関係などに左右される事無く、確実に永久に個人として保存されることになるのである。

葬儀から埋葬、墓地までのアメリカ合衆国の死にまつわる事項は、見て美しいものであることが共通した特徴である。死という事実まつわる陰鬱さや激しい悲嘆の表現はあまり見られないし、用いられる装飾なども、明るく華やか

なものである。そしてまた遺族や近隣の人々がかつて担っていた役割を、現代では葬儀社が全て行っており、人々は葬儀社という専門家との契約によって、遺族の有無や近隣との生前の関係の在り方などに左右される事無く、葬儀が行われ墓地が維持されることを確信できるのである。

(2) 葬儀業者の専門家としての成立

ここではアメリカの葬儀業者について、それが専門職として社会のなかに位置付けられている在り方を見てみたい。アメリカ合衆国の葬儀業者は、Funeral Director (フューネラル・ディレクター) と Embalmer (エンバーマー) の二つの資格に、業務の性質上分けられている。エンバーマーは遺体のエンバーミング、即ち防腐、修復の措置を行う専門家であり、ディレクターは遺族との接触や役所の手続き、経営面について担当する。こうした資格は、州ごとに発行されるものと合衆国全体に通用するものとある。この資格を取るための教育コースを提供する College of Mortuary Science/Funeral Service Education は現在全国で42あり、1994年の時点では約2900人の生徒がこうした学校で学んでいるという⁽⁶⁾。こうした大学は、公立のものと私立のものと半々くらいだということで、私立のもの多くは、大手の葬儀社が人材の確保などの為に非営利として経営しているものである。

エンバーミングは南北戦争の際に、兵士の遺体を遺族に送り返すのにあたって行ったのが、医学分野ではない一般の遺体の防腐措置の始まりといわれる⁽⁷⁾。1965年に連邦軍兵士のエンバーミングを行う医師をテストによって認可するようにしたが、葬儀業者がエンバーミングを行うようになったのはこれ以後のことである。第二次大戦前には葬儀のみならずエンバーミング

も各々の家で行われることが多かったが、大戦後には次第にいずれも葬儀社で行われるようになる。これは、アパートメントが増えたりなど物理的に家が手狭になったためや、都市化などで葬儀を支えるコミュニティが解体した為といわれているが(NFDA, 1994: p17)、むしろ葬儀がますます死者個人のためのもの、という性格を強めてきた結果と思われる。

葬儀業はそもそもは葬儀用品や柩を扱うだけのもので、家具販売などとの兼業が多かったが、エンバーミングの発達や葬儀社の建物での葬儀の増加等によって、分業していた幾つかのサービスが専門の仕事に統合され、葬儀に関わるサービス一切を提供する専門家として自認するようになる。また死亡確認書が州法により保存され、州の保健省が埋葬・火葬の許可に関与するようになるとともに、ライセンス制の確立が求められるようになり、1984年のヴァージニア州を最初として20世紀初めにはほぼどの州でも一般化する。資格登録という圧力は、葬儀業者が一つの職業的グループとしての地位を確立する一つの契機となったと考えられる⁽⁸⁾。

1960年代からはmulti unit operationsとって、葬儀の扱いから墓地の販売まで手懸ける、死をめぐる総合サービス産業化の傾向とともに、フランチャイズ化の傾向が見られるようになる⁽⁹⁾。幾つかの企業は、合衆国以外にもカナダ、オーストラリア、メキシコ等に進出する等、国際的な営業を行っている。こうした大企業においても、連邦商取引省の規定によって葬儀業者は葬儀費用の明細を出さなくてはならない。業者にお任せして費用の明細を要求しない日本とは異なり、セットで販売する場合も一つ一つの商品の値段は細かく決められ、メニュー内容も明確なものとされている。

また第二次大戦後Preneed⁽¹⁰⁾と呼ばれる、自

己の葬儀や墓地を予めアレンジし、かつ費用も前もって払い込んでおく、葬儀、墓地の生前契約が発達してきている。例えばNFDA⁽¹¹⁾の1994年のパンフレットによれば、1991年においてNFDAに加入している業者の98%はこれを提供している。この制度を利用すれば、死後遺族が慌てて葬儀を手配する必要はなくまた経済的負担もない。また契約者にとって身近な遺族がいない場合でも自分の望む葬儀が行えるという利点などから更に発達すると見込まれている。

以上のようにアメリカにおいては葬儀社は、死をめぐるサービスの一切を提供する総合産業として発達するとともに、試験によって認可される専門家として社会的な位置付けを得ている。その産業としての発達が、遺族や近隣に依存する事無く個人が自らの死後を処理することを可能にするとともに、第三者の専門家としての位置付けが、死をめぐる場面で死者本人が自己決定をするのを支える役割を果たすことを可能にしているのである。次では、実際に訪れた現地の葬儀大学・葬儀社の在り方を見てゆく中で、こうした葬儀社の社会的な位置付けについて更に見てゆくことにする。

(3) 葬儀社の専門性とその社会的受容—— 現地視察から

以下では実際に見学した葬儀大学・葬儀社について記述し、葬儀業が実際にどのように死をめぐる社会関係を支えているのかを考察する。ここでは見学したものの中から、1994年10月28日に見学したテネシー州ナッシュビルの葬儀大学と霊園、1994年11月1日に見学したニューヨーク州マンハッタンの葬儀大学とクイーンズの霊園を選び、各々インタビューの結果や見学した様子を、パンフレットなども参照しながら記述する。またその中で、それぞれの葬儀社・

葬儀大学が、どのように専門性を確立しているのか、またその社会的な位置付けがどのくらい広く社会的に受容されているのかを考察する。

1、John A. Gupton College⁽¹²⁾

この私立大学は、テネシー州の州都ナッシュビルの中心街に位置する⁽¹³⁾。パンフレットによれば、創立は1946年、John A. & Bernadean Guptonによるもので、Guptonはその前はナッシュビルのGupton-Jones College of Mortuary Scienceのオーナーであった。校長の説明では、現在70余名がここに学んでいるが、多くは親が葬儀業を営んでいるものである⁽¹⁴⁾。

この大学は目的にあわせてコースを選択するようになっている。葬儀業に従事する資格を得るだけの目的のものには12ヵ月50単位のコースを、人文科学の短大卒業資格も得ようとするものの為には16ヵ月65単位のコースを提供する。約半数は高卒で入学しているが、他の職業にいったん就いてからという者の方が少し多い。ATCテスト（合衆国の大学入学資格テスト）を合格していることが入学条件となる。

この州ではエンバーマーは学校にいかなくてはならないが、フューネラル・ディレクターは2年の実習を葬儀業者のもとで行えば州の資格テストを受ける資格を得ることができる。ただし資格を得るための条件が次第に厳しくなっているため大学で学ぶ傾向が強まっている。この学校では殆ど全ての学生がこのテストに合格するという事である。

授業の中心はやはりエンバーミング等の専門的な技術の養成である。校長の説明では、遺体の尊厳を持った扱いを重視しているとのことで、授業ではエンバーマーのライセンスを持った教師が生徒の前で遺体の修復、化粧等の作業を行うが、生徒は実際の遺体へのエンバーミン

グは行わず、顔の修復作業などは蠟粘土で学習する。遺体は契約した葬儀社から請け負うもの、または警察、病院で身元不明とされた遺体も引き受ける。後者の場合は学校で入棺し葬儀も行う。また日本のように遺体からの細菌感染に関して全く無防備ではなく、細菌学的な知識を学習するとともに遺体から従業員への感染防御には十分注意が払われていた⁽¹⁵⁾。

人種差別に対する配慮は注意深いもので、校長によれば、学生も引き受ける遺体も人種的な偏りが無いようにしているという。学生の1/3は女性、1/3は有色人種であり、遺体の顔の修復作業も様々な人種の顔面の特色を白人、黒人、黄色人種等一通り学ぼうようになっている。こうした注意は、葬儀業者が民族的、宗教的な色彩を脱色した中立的な第三者機関として成立するための配慮と考えられる。

2、Woodland Mausoleum and Cemetery⁽¹⁶⁾

ここは墓地以外に、フューネラル・ホーム、チャペル、エンバーミング・ルーム、柩など葬儀用品の展示ルーム等を一通りそろえた、multi unit operationsと呼ばれる、葬儀にまつわる総合的なサービスを提供する企業である。7人のエンバーマー（かつフューネラル・ディレクター）を抱え一年に約1800件の葬儀を扱っている。専属の無教派の牧師がいて、家族が故人の教会の牧師を連れてこない場合に葬儀式を執り行う。個人の生前の宗教的生活の在り方に関わらず葬儀が行えるようになっているのである。

屋外墓地は墓碑などはたてず、広大な芝生にブロンズのプレートをはめこんでいる。これは突起物をなくして大型芝刈り機が使えるようにし、芝生の整備などの管理を容易にするためであるが、そのため墓地を見渡すと、広がる芝生

には遺族が持参した色とりどりの造花の花束しか見えない。白い方形の五階建てのビルディングには、モーソリウムとコロンバリウムを備えている。ここでは火葬率は約20%程である。屋内墓地と屋外墓地では、屋外の場合土を掘り起こし柩を埋める費用がかかるためさほど値段の違いはないが、日本と違って屋内墓地もよく売れているという。屋内も屋外も売りおわると売却時の費用を信託にした利子で企業が永久に管理していくのである。

ここでも差別問題は強く意識されている。例えば、エンバーミングは、たとえ死因がエイズであろうと差別せず、受け入れて行っているという。またバイブルベルトといわれる南部であっても建物自体や個々の墓碑などに特定の宗教色は殆ど見られない。

ここで注意されているのは、葬儀や墓地が明るく美しいものであることである。エンバーミングで重要なのも仕上がりの美しさで、保存期間に関するトラブルはほとんどないという。墓地に収めた後、遺族が遺体の保存状態を気にしたりすることはないのである。同様に葬儀費用の大きな部分を柩が占める。柩の展示室には、ステンレスからマホガニーまであらゆる素材の、美しい内張りの柩を展示していて、その選択に故人の個性が反映されるとともに、葬儀において遺体を美しく演出する一助となるのである。

3、American Academy McAllister Institute⁽¹⁷⁾

この私立葬儀大学は、ニューヨーク市の中心部に位置している。「便覧1994-1996」6頁によれば、1926年に設立されたMcAllister School of Embalmingと1933年に設立されたAmerican Academy of Funeral Serviceが1964年に合併して設立された学校である。学校自体は狭いビルの

一部を借りて運営されているがSt. John's Collegeと提携して、ライセンスを取るためのコースだけでなく、あわせて大学卒業の学士号も取ることができる。また、エンバーミングに関する医学的な知識は、公立Bellevue Medial Centerと協力して、そこにおいて学ぶことになっている。ここでホームレスの遺体などをエンバーミングする。その遺体は州や市が埋葬することになる。入学者には高卒の資格が求められている。また入学時の二人の身元保証人のうち、少なくとも一人は葬儀業者であることが望まれている。学校は、葬儀業には知識や健康ばかりでなく、人格的な成熟や他者を援助したいという気持ちを持つことが必要と考えて授業プログラムを組んでいるという⁽¹⁸⁾。テストに合格したら、Funeral Homeで1年間見習いをしなくてはならないので、学校では見習いをする学生と人手を求めている葬儀社との仲介をする。

授業内容の中心はやはりエンバーミングの専門技術の学習である。差別の問題はやはり意識されていて、学監によれば、どんな遺体でも受け入れられるよう可能な限り多様なケースについて学習するという。例えば、人種による肌の色や顔立ちの違いなどをよく理解して損傷した顔面を復元することや、アルコールや薬物の中毒患者のエンバーミングの仕方等である。専門技術には敬意が払われていて、資格のない生徒は実際に遺体は扱わないようにしている。

学監の話では、こうして専門性の確立に努力しているが、人々の間には葬儀業への蔑視や、お金持ちになりたいから、とって学校にくるものもいるという。彼は葬儀業が儲かるというのは間違った偏見で、仕事の報酬はさほどよくはなく、儲かっているように見えるのは世襲で葬儀社を経営する場合であると説明している⁽¹⁹⁾。

4、Farenga & Sons, I. N. C. (20)

この葬儀社はニューヨーク州クイーンズ区アストリアにあり、またそこに墓地をもっている。アストリアでは最大の葬儀社で、3人のフェーネラル・ディレクターで営業している。ニューヨークには、民族ごとの小さな家族経営の葬儀社がまだたくさんあるので、こうした小さくて設備のない葬儀社のために、三つあるチャペルの貸し出しやエンバーミングの代行も行っている(21)。

この葬儀社には多様な民族の伝統が混在している。柩の展示室にはユダヤ人の為の柩も販売されている。完全に土に還るように金具など使わない木製の、ユダヤの星の紋章の入ったものである。またこの墓地のモーソリウムを利用するのは、イタリア系カトリックのように、土中に埋められるのを恐がる人々であるという。カトリックの人々が葬儀のvisitationに訪れた人々に贈る、キリストの絵などが入ったカードも扱っていた。このカードには、祈りの言葉とともに、埋葬されることになる墓地の場所やモーソリウムの番号などを、後で墓参に訪れるのに便利のように記載してある。また遺体を生国へ輸送するサービスも行っている。それには2週間は保つようにエンバーミングしたうえでコンテナに密封することが必要で、輸送は航空便になる。

この葬儀社でも葬儀、墓地の生前契約Preneedを販売している。ただ予め葬儀式の内容を決めておくだけでなく、先に費用も払い込む方が利用者が多いというが、これはニューヨークでは葬儀が高額のため（この葬儀社では葬儀のみで平均6000\$という）と考えられる。前払いの場合は法廷弁護人をたてて費用を信託にし、契約者死亡時に葬儀社が指定されたとおり

のメニューを実施するという形をとる。物価の上昇は金利で相殺することになるが、行政の監視もあって、赤字であってもメニューは指定どおり行わなくてはならない。

以上見てきたように、アメリカの葬儀大学・葬儀社は、専門的な技術をもって利用者との明細な契約にしたがってサービスを提供する、という形で、つまり葬儀の場面における第三者である専門家の立場で、葬儀のホストとなる死者を個人として支えている。葬儀社・葬儀大学は、この立場を確立するために、専門技術の教育制度を確立しライセンス制によって営業するというばかりでなく、諸種の宗教や民族的な伝統に対して中立的に、またあらゆる死因の死者をも受容するという態度をとっている。またボランティア活動に参加する等、地域社会で尊敬を得るような生活態度をとることを授業の中などで注意している。そうした態度によって、アメリカの葬儀社は、この社会の人々の個人を基点とする社会関係の在り方を、死をめぐる場面において支える役割を得ているのである。

(4) アメリカの葬儀と葬儀社

ここでは、以上で見てきたアメリカの葬儀社・葬儀大学の第三者である専門家という在り方を分析する。

(4) - 1 : 普遍性とデノミネーション

アメリカで訪問したどの葬儀社も、自分たちは差別をしない、という点を非常に強調している。自分の葬儀社は、どんな宗教の葬儀も執行っており、またここで葬儀をした中には黒人もユダヤ人もヒスパニックもいること、またどんな人でも、それがたとえエイズ患者だったとしても、拒否したりしないと述べるのである。

また同時にどんなエスニックな特色についての質問も、注意深く回答を避けている。例えば、カトリックの人の方が墓参に頻繁に訪れるか、という質問に、墓参は死者への思いを表現する行為だからだれでもすることだと回答するなどである(22)。

しかし実際には無論、葬儀社によって偏りがある。そもそも葬儀社が家族経営の小規模なものだった頃は、各エスニック毎に成立していたといってよいのである。各教派、各民族ごとに各々の教会があったように、黒人の葬儀社には黒人だけが、アイルランド人のものはまた別に、といった具合である。とりわけ依然として家族経営の小規模な業者の多い都市部では、所によってこのような状態が残存しているのである(23)。現在では統合されたが業者団体も最初はエスニック毎別々に成立した(Reather, H. C., 1994: p2)。

しかしこうした各々の特色があるためアメリカ一般の葬儀について語れない、ということはない。むしろアメリカの葬儀の手順は、エンバーミングの実施など、かなり均質なものであり、宗教的、あるいは民族的な特色はむしろこうした手順の添え物に過ぎない、といっても過言ではない(24)。実際の葬儀の折にはこうした特色は、葬儀社の提供するメニューから選択することで実現されているのである。R. N. ベラーはデノミネーションの背後にあってアメリカ人のアイデンティティを支えるある種の信念を「アメリカの市民宗教」という言葉で呼んだが、その市民宗教があるように、死者儀礼の共通な形式が成立していると言えるだろう。いずれにせよ、こうしたバリエーションを多く含んだ在り方は、死をめぐる総合サービス産業として出現した幾つかの巨大チェーンが出現すると共に、次第に宗教色、民族色の希薄な葬儀を取り

行う傾向が生まれ、さらなる均質化の度合いを強めているのである。

(4) - 2 : 遺体へのこだわりに見る身体観

アメリカの葬儀において、蓋を半分、あるいは全部開いた柩に横たわる遺体が存在することはたいへん重要なことである。弔問客が遺体と対面する場合、「一般に、安堵と無言の称賛がその反応である」(Huntington, R. & Metcalf, P., 1979 = 1985: p280-281)。安堵とは死が故人の面影に何ら影響を与えていないことへのものであり、そして称賛とは遺体が安らかに眠っているかのような出来栄であることについての葬儀社のエンバーミングの腕前に対するものである。「特に故人がまるで死人のようなどといったことを口に出すほど自制心を失った場合、その者は葬儀屋によって優しく連れ出される」(Huntington, R. & Metcalf, P., 1979 = 1985: p280-281)。またハンチントンとメトカーフは、遺族が病院で死亡した故人に、葬儀社に引き取られる前に面会したいと頼むことは殆どない事、visitationや葬儀に近親者が皆集まることは重要だと考えられているが、埋葬が終わるまで立ち合うものは殆どいない事を述べる。

ミットフォードは現代アメリカのエンバーミングの目的は、エジプトのミイラ等とは違って、長期保存ではなく遺体の容貌を自然に保つことであると言う。現在アメリカで行われている防腐処置は、葬儀が終了するまで2~3週間ほどの効果のもので、いったん葬儀が終了すれば家族は埋葬された柩を再び開けたりすることはない。多くの葬儀業者はこうした演出が、遺族の最後の思い出memory pictureを美しく構成し、遺族が悲嘆から回復するのに役立つのだと説明するが、ミットフォードはこうした演出が死を受容しやすくするといっても、それは「フィル

ターを通して太陽を見るように」(Mitford, J., 1963: p94)死を眺めるものであると批判する。また彼女はこうした死を直視することを避けようとする態度は、死に関する婉曲語の発達にも見られると述べる⁽²⁵⁾。しかしアメリカにおいては死は、どのようなものとして忌避されているのだろうか。

エンバーミングは臨終の際の苦悶の表情を死者から拭い去り、また死=腐敗というイメージを否定する。アリエスはこうしたエンバーミングの機能を、カイヨワの言葉を引用しながら「全身衣服で包まれた死者たちは身体的人格を保ちつづけ」(Ariès, P., 1975 = 1983: p242)ているという様子に見る。アリエスはこれを例えば病院で医療スタッフが患者が治癒への努力を諦めることを許さないように、臨終において死を受容することを否定する傾向の延長上にあると考えている。人々はエンバーミングによって、受動的に受容するのみの運命としての死、人格の終焉としての死を否定し、未来へと努力し創造してゆく個性ある人格が死を越えて存続することへの信念を支えるのである。

またこうした人格の在り方は、この社会に特有の身体感覚と対応していると考えられる。例えばIFTA⁽²⁶⁾のシンポジウムのレポートでは、足の骨を医療用に提供した後のエンバーミングのやり方についてのものがあつたが、これは大腿骨と脛の骨を摘出した後にプラスチックの棒を埋めて足の形を再形成するというものである。柩が上半身のみ開けたものであるならば足は見えないし、ズボン等に詰め物をしてよいはずだが、病院側ではこうしたエンバーミングによる足の再形成が、人々にとって死後の組織の提供を心理的に容易にすると述べている。つまり皮膚表面における身体が完全な外観を維持していることが大切なのである。

その一方で、そうした外観を再形成するために皮膚下にゲル剤を注入したり、歯茎に針金を通して顎を閉じたりする事は、受け入れられている。アメリカで葬儀業を学んだ鈴木英雄は、アメリカの葬儀においては遺体とはホストであり、そのための重要な社交上のファクターとなる目や口元の表情を作ることが重視されることを述べているが、さらにこうした方法は日本では受け入れられないだろうと言う(鈴木, 1981: p76)。それは修復の方法がかなり遺体に侵害的で、日本では遺族がそうした事を嫌うと考えてのことである。

このようにアメリカの葬儀における遺体の扱い方に反映されている身体観は、日本という異質な社会を参照することで、比較社会的により明瞭にすることができると思われる。葬儀などの場面で見られる遺体の扱いは、個人的な身体に対する感覚よりは、より社会的に妥当とされる身体の扱い方を反映したものである。従ってそこから読み取った身体観は、各々の社会の人々が現在その中で生活している社会関係の在り方に基づいて、社会ごとに異なる様相を呈するものとなるはずである。このことは、日米という相互に異質な社会を比較することで葬儀社のあり方の違いと共に、次のように具体的に表れている⁽²⁷⁾。

鈴木の言うように日本でエンバーミングが遺体に侵襲的に感じられるのは、日本社会では身内の遺体を自らの身体のようにして感じ関わるのが当然とされ、また遺体の処遇の仕方が身内の皆の体面と関わるという社会関係の在り方の為である。従って遺体をメスで傷つけるのは忍びないと感じられるし、また身内のことも考えず献体など一人で決めるのは自分勝手な振舞いと非難されるのである。従って日本における葬儀業は、こうした身内の集まりの情緒的共

同性を、まるでその一員であるかのように理解し、補完する役割を果たすことが期待される。

一方、なるべく遺体を身内の手で扱おうとする日本と異なり、アメリカではエンバーミングの過程は死者のプライバシーとして業者だけが扱い、遺族にも公開されない。修復され装われる以前の身体は、死者のプライバシーにあたるのである。そしてこうしたプライバシーの領域に関することは、当人が契約した第三者、即ち葬儀業者のみが契約された内容に従って履行するという形で介入することで守られている。身体とはその当人のみが自由に支配できる領域、プライバシーを構成する領域なのである。こうした在り方を「プライバシーとしての身体」と呼ぼう。「プライバシーとしての身体」は、その所持者である人格が、他者の意図と独立して自由にできる領域である。それは、自身の利害については当人のみが判断できるもので、他人が代行できるものではない、という自己決定の原則に対応して成立している。そしてまたこの身体とは、当該人格がその個性を表現する手段であり、自由にそのために加工することができるものなのである⁽²⁸⁾。アメリカの葬儀業は、専門家として介入することでこうしたプライバシーを守る役割を果たしている。

死者をホストとするアメリカの葬儀は、エンバーミング等の措置を専門家として施す葬儀業の介入によって遺族からも死者個人のプライバシーを保護し、そうすることで身体を装い個性を演出する人格が死後も存続していることを仮構している⁽²⁹⁾。言い換えれば、葬儀業者が死後の遺体の処遇を死者当人の人格の表現として組織することで、人々は個人として自らの死後の運命をも自己決定したものとして把握しているかのようにふるまうことができるのである。即ちアメリカの葬儀社は、こうした仮構を第三

者である専門家として支えることで葬儀をアシエンショナルな形で成立させているのであり、言い換えれば葬儀社がビジネスとして発展しているのは、自らの身体を支配する人格がアメリカ社会の社会関係の基点となっているからであると言えるだろう。

(5) まとめ；第三者機関としてアメリカの個人を支える葬儀社

アメリカの葬儀社は人々に、親族や近隣の人々との絆に頼る事無く、自らの死後の在り方を決定できるという自由を与えるものであった。そしてまたそれは、プライバシーとしての身体を支配する人格が、死という運命をこえて存続しているという信念を維持することを可能にしているものでもある。アメリカにおいて隠蔽あるいは拒絶される死、とは身体を演出する人格の消失としての死である。葬儀社は当人格の死後にその生前の個性を身体に再現することで、それを演出している主体としての人格を仮構しているのである。

こうした在り方をもっともよく象徴しているのは葬儀、墓の生前契約である。これは単に、遺族に葬儀の執行やその費用の負担をかけないように配慮するというばかりではない。葬儀をすべて故人の費用と責任で行うことは、葬儀を、故人をホストとするパーティとして演出する、という傾向を典型的に実現するものであり、これによって葬儀に参加する人々は故人の近親者であっても、その演出を観る単なる客となるのである。

また葬儀の演出ばかりでなく、墓地を個人、あるいは夫婦ごとに永久に管理してゆくのも私企業である。W. L. ウォーナーは、墓地は「人の不死への欲望を表現するもの」であり、また単なる「身体ではなく聖なる人格 person」

(Warner, W. L., 1959: p285)の納まる場所であると述べているが、こうした人格が永遠に墓地において維持されることを可能にしているのも企業なのである。

アメリカ社会においては、葬儀社が第三者機関として介入することで、個々人は自らの死後の運命をも支配することが可能になるのである。言い換えれば葬儀社の介入は、葬儀という死をめぐる場面をも、様々なコミュニティから独立したアソシエーションな社会の一局面として展開することを可能にしていると言えるだろう。この問題を更に考察するにはエスニシティの問題や、また葬儀社の成立以前と以後との比較などの課題が考慮されなくてはならないが、本稿の射程はこの命題を確認する所までである。

註

- (1)論者の見た遺体は、フロリダからニューヨークに移送されたもので、フロリダの温暖な気候ゆえ強い薬で防腐されたのでかなり皮膚が硬化している、と説明されたものだったが、一見したところではまったく生きているかのようであった。ガンで亡くなった為、かなり面糞れていたのを皮膚のしたに薬を入れて顔を戻したという事で、修復の参考にした10年前の元気な故人の姿そのままだった。人々はこうした遺体を見て「まるで生きているようですね。」「とてもきれいに見えますね。」等と言って誉めるのである。
- (2)葬儀社は、死者に関する「最後の記憶」が遺族の悲嘆からの回復にとって重要であるといい、またこうした美しい演出がそれを援助することになると述べる。こうした言葉はNFDA (NFDAについては註(11)を参照)の出版物である"The American Funeral"にも繰り返し見られるし、また1994年10月

27～29日のIFTAのシンポジウムで葬儀の意義を述べる葬儀社の言葉のなかにもしばしば使われていたものである。

(3)(Fulton, R., 1984 = 1984: p212)

(4)死亡からこの儀礼まで通常2～4日であるが、これはアメリカで通例見られるように独立して家を出た子供達がしばしば遠方に住んでおり、これらが集まるのを待って行われるためである。遺体の防腐はこうした間にも遺体が腐敗せず、また柩の蓋を開けて葬儀を行えるように、という事から普及したのである。近ごろでは遺体を先に火葬、あるいは埋葬してしまつてmemorial serviceと呼ばれる遺体のない葬儀を行ったりするものもあるが、葬儀における遺体重視の傾向に影響するほどではないという。例えば1991年間に遺体をすぐ埋葬しメモリアルサービスを行ったのは5.3%で、残りは、葬儀、あるいは墓地での葬儀を行っている。また土葬は78.1%で、火葬の場合でも、85.4%は柩に収めて儀礼が行われている(NFDA, 1994: p37)。

- (5)1992年の時点で、葬儀業者が最も多く仕入れた柩は密閉型のスチールのものである。木製の物は三番目となる。こうした人々の嗜好は、遺体が土に還るのではなく密閉された柩の中で永久に保存される、という感覚を重視したためと考えられる。
- (6)こうした教育機関は、四年制大学のなかに設けられたコースと、コミュニティ・カレッジにおけるものとあるが、いずれも1959年に設立されたアメリカ葬儀業教育委員会American Board of Funeral Service Educationによって監督されている。この委員会は1929年に設立された委員会の後身で、1972年には合衆国教育省の認可を受けている。
- (7)エンバーミングは、内臓を摘出するタイプのものが古くからヨーロッパで、長い葬列を組む貴族などに対して行われていた。現在行われているのは血液を防腐剤に置換する動脈注入タイプのもので、頸部、または大腿部の動脈に防腐剤を圧力をかけ

て注入し、血管にかかる圧力によって同じ部分の静脈に開けた穴から血液を排出する。この方法は、遺体解剖が医学の学問的発達の重要な手段であった頃に開発されたものである。医学的なエンバーミングは主にフランス等で発達したが、一般の葬儀で普及したのはアメリカ合衆国においてである。アメリカでは遺族がすべて集まるまで葬儀を待つ習慣があり、それまでも氷などによって遺体を保存する努力がなされていた。

- (8) こうした専門家としての社会的認知は、葬儀業を単なる仕事occupationではなく一つの専門職professionとして認知させようという努力の結果として徐々に成立してきたものである。それは困難な未完の過程で、例えば1959年のフロリダの州立裁判所の判例はundertakingをprofessionというよりはbusinessであるとしたし、1966年に労働省に提出されたFuneral DirectorとEmbalmerをprofessionとしてほしいという請願は拒否されている(Raether, H. C., 1990: p3)。現在でも、葬儀業に関する教育制度の確立や遺族に対するカウンセラーなどを置くという努力が続けられている。
- (9) この傾向は、葬儀業における競争の激化の中で、スケールメリットの追求、また相続税対策などから生じてきたという。例えばService Corporation Internationalという企業はアメリカで最大のチェーン店であるが、1994年には合衆国内に676のFuneral Homeと183の墓地、60の火葬所を持ち、それ以外にもカナダ、オーストラリアに進出している。また1993年間でアメリカの三大葬儀社はあわせて全葬儀の14%を扱っている(NFDA, 1994: p18)。
- (10) Preneedとは、葬儀や墓地などの内容や形をあらかじめ指定しておくPrearrangementと、その代金まで予め信託の形で払い込んでおくPrepayedを組み合わせたものである。アメリカでは第二次大戦後に、巨大葬儀産業の発達とともに、中西部を中心として一般に普及した(NFDA, 1994: p23)。

(11) National Funeral Directors Association。1882年に成立した葬儀業者の全国組織であり、州ごとの事情の違いを鑑み、州ごとの組織と個別の葬儀社が直接参加する組織の二本立てとなっている(Raether, H. C., 1990: p11)。

(12) この葬儀大学では、PresidentのS. Spann氏が見学の案内と授業内容などの説明をしてくれた。また記述の折は入学希望者の為のパンフレットも参照した。

(13) ナッシュビルは合衆国南部のハブ空港をもつ南部の交通の要衝であり、ビジネス都市として発展していて、日系企業の多くもここにオフィスや工場を持っている。またサザンバプティストのヘッドクォーターでもあり年に一回世界大会が開催される地でもある。テネシー州では毎年100~150人のエンバーマーとフューネラル・ディレクターの資格を認定している。学校のパンフレットとともに渡された資料によれば、現在州内には436の葬儀社があるが(全国では22000社)、毎年州の査察を受けているという。またライセンスを持ったエンバーマーは1300人、フューネラル・ディレクターは1000人である。(全国では89000人)多くの葬儀社は家族経営の小規模なものであるが、コングロマリット化の傾向があり、例えばテネシー州の葬儀社でも25社がService Corporation Internationalというヒューストンに本社を持つ大手の企業に買収されているという。

(14) この大学では常勤の職員は5人、他大学からの非常勤講師が16人である。幾つかの他の葬儀大学のパンフレットを見ても、平均的規模と構成である。学費は本代を含めて一年で大体7500~10000\$である。授業は三つの分野にわたり、化学、解剖学、微生物学、病理学という自然科学と、心理学、社会学など人文科学、そしてフューネラルサービス、葬儀科学Mortuary Science、エンバーミング等の専門分野である。

- (15)日本の葬儀業者の現状については、朝日新聞1994年10月20日19頁「ルポお葬式の祭壇裏2」に詳しく語られている。
- (16)この記述は1994年10月28日訪問の折のマネージャー氏の説明からである。
- (17)ここでは1994年11月1日、Academic DeanのD. C. Mongelluzzo氏がインタビューに応じてくれた。また「便覧1994-1996」を参照した。10人の理事、4人の常勤職員、13人の非常勤講師がいる。現在生徒は約150人である。授業料は一学期、本代を含めて2500\$程、資格取得のためのコースでは三学期12ヵ月、あわせて学士号も取るなら四学期16ヵ月が修了に必要である。また既に職にあるものの為の再教育のコースがある。授業は、医学と公衆衛生、社会科学、経営、法律の四つの分野にわたる。
- (18)この学校の授業は厳しく、過去三年で296人の入学者のうち卒業したのは211人(71.2%)であるが、そのためか資格取得テストの合格率は高い。例えば1992年のテストでは卒業生の93.2%が合格している。また過去二年内に全卒業生の93%が就職していて、これは全葬儀大学卒業生の平均90.2%をわずかに上回っている(「便覧1994-1996」2頁)。素行不良な学生は退学させると明文化する一方で、卒業時に成績優良賞や皆勤賞などの他に、素行の優良だったものにも賞を与えている。また卒業生には、職業誓約Funeral Service Oathが要求される。
- (19)アメリカの葬儀業界の営利主義的な態度に対する批判としては(Mitford, J. 1963)。彼女は、アメリカの葬儀の費用が高額であることを述べ、イギリスの葬儀の在り方と比較してそれが無用な奢侈であると指摘する。そして遺族にとって最後のお別れの時の遺体の美しさが心理学的に重要だ、などという葬儀業者の主張は自分を売り込むための神話であるとのべている。
- (20)この記述はAmerican Academyの学部長でもあり霊園のフューネラル・ディレクターでもあるD. C. Mongelluzzo氏が案内し説明してくれた内容からである。
- (21)インタビューによれば、年間の葬儀は約325件、チャペルのみの貸し出しが15~20件、エンバーミングのみ行うのが約100件である。
- (22)Farenga & Sons, I.N.C.を訪れた際のD. C. Mongelluzzo氏とのやりとりである。
- (23)ウォーはこうしたアメリカ社会の在り方を、“The Loved One”というアメリカの霊園を舞台にした作品のなかで皮肉っている。舞台となった霊園の受け付けの女性は次のように述べている。「『当霊園は白人専用霊園でございましてね。創設者が生者のためにこの規則をお作りになったんです。最後の審判の日には同じ人種同志いっしょにいたいだろうとお考えになって。』」(Waugh, E., 1948 = 1976: p48)
- (24)メトカーフとハンチントンは、多様な社会の葬送儀礼をアメリカのものと比較してアメリカの葬儀の形態は「全域にわたって驚くほど一様である。その一般的特徴とは遺体の葬儀堂への迅速な移動、エンバーミング、画一的な『遺体との対面』、埋葬による遺体処理である」と述べる(Huntington, R. & Metcalf, P., 1979 = 1985: p263)。
- (25)例えば、柩coffinをcasket、遺体をloved oneと呼ぶようなことである。
- (26)International Federation of Thanatologist Associations
- (27)葬墓の在り方と身体観との関連を、比較社会的に読み解いたものとしては(松本, 1994)。
- (28)自己決定の原則に基づく治療行為に関する判例については(唄, 1983)。例えば1977年サイケヴィッチ事件の判例では、重度の精神障害者に白血病の治療を施すか否かについて、当人は苦痛をとまなう治療を拒否しているが、当人は治療行為の意味など理解できないとして、収容施設の院長が代行判断を求めている。判決ではこれを拒否し、当人に判断させることを正当としている。自己決定の

原則のもとでは、たとえ他者の目には当人の利益を害なうと見える場合でも、当人の判断が優先される。また逆に身体を統べる人格が失われた、あるいは欠損していると考えられる場合、その身体を単なる対象として扱う傾向が見られる。

(29)遺体の処分権は、どこでも生前の故人や遺族に帰属するものではない。例えばオーストリアでは遺体は国家の所有とされ、死後の臓器摘出などは当人の意思の確認や遺族の承諾などなくとも行うことができることが法制化されている。

【参考文献】

- Ariès, P. 1975, *Essais sur L'histoire de la Mort en Occident - Du Moyen Âge à Nos Jours*. Éditions du Seuil=1983, 伊藤晃 成瀬駒男訳, 『死と歴史——西欧中世から現代へ』, みすず書房
- 唄孝一 1983, 『医療と法と倫理』岩波書店
- Becker, E. 1973, *The Denial of Death*=1989, 今防人訳, 『死の拒絶』, 平凡社
- Fulton, R. 1984, *Death and Dying*=1984, 齊藤武 若林一美訳 『デス・エデュケーション——死生観への挑戦——』, 現代出版
- Habenstein, R. W. & Lamers, W. M. 1955, *The History of American Funeral Directing*, National Funeral Directors Association.
- Huntington, R. & Metcalf, P. 1979, *Celebrations of Death - The Anthropology of mortuary Ritual*=1985, 池上良正 川村 邦光訳 『死の儀礼——葬送習俗の人類学的研究』, 未来社
- 井門富士夫編 1992, 『アメリカの宗教——多民族社会の世界観』, 弘文堂
- 井上治代 1990, 『現代お墓事情』, 創元社
- 松本由紀子 1994, 『葬墓制の比較社会学』, 『ソシオロギス』18号
- Mitford, J. 1963, *The American Way of Death*, New York
- 長江曜子 1991, 『欧米メモリアル事情——デスケア・サービス最新レポート』, 石文社
- 鯖田豊之 1990, 『火葬の文化』, 新潮社
- Sudnow, D. 1967, *Passing on: The Social Organization of Dying*=1992, 岩田啓靖、志村哲郎、山田富秋訳 『病院で作られる死——「死」と「死につつまること」の社会学』, せりか書房
- 鈴木英雄 1981, 『アメリカの葬儀状況』, 『アメリカの葬儀状況』刊行会
- Warner, W. L. 1959, *The Living and the Dead - Yankee City Series vol.5*, Yale Univ. Press
- Waugh, E. 1948, *The Loved One*=1976, 由良君美訳 『囁きの霊園』, 早川書房

[参考資料]

- American Academy McAllister Institute の Bulletin 1994-1996
- John A. Gupton College のパンフレット
- NFDA(National Funeral Directors Association) 1994 *The American Funeral*
- Reather, H. C. 1990 *Funeral Service: A Historical Perspective*. NFDA

* この研究は、「全日本冠婚葬祭互助協会」「日本科学協会」の援助をえて行われたものである。

(まつもと ゆきこ)